ベルギー研究会　会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

第６号
2018年5月

「ベルギー学」シンポジウム2018を開催します

「ベルギー学」シンポジウム2018「交流の“いま”」

1866年8月1日、日本はベルギーと修好通商航海条約を締結しました。それから150年後の2016年、私たちは「文化・知の多層性と越境性へのまなざし―学際的交流と「ベルギー学」の構築をめざして―」と題し、記念シンポジウムを開催しました。自然科学から人文・社会科学まで、幅広い分野の専門家たちによる講演、パネルディスカッション、研究発表がおこなわれ、延べ302名が参加したこの研究集会は、盛会のうちに幕を閉じました。

そしてこのたび、日本とベルギー両国間の交流を促進し、相互理解のさらなる深化、「ベルギー学」の構築による日本におけるベルギー理解のさらなる向上に寄与することを目指して、あらたに国際シンポジウムを開催いたします。今回は「日白交流の“いま”」をテーマに、こんにちもなお進展し続けている両国の人的・知的交流を共有し合う場を設けたいと思います。多くのみなさまのご協力、ご参加を心よりお待ち申し上げております。

「ベルギー学」シンポジウム実行委員会

概要

名　称：「ベルギー学」シンポジウム2018「交流の“いま”」
　　Ongoing Exchanges between Belgium and Japan
日　時：①2018年12月7日（金）（時間未定）
　　②2018年12月8日（土）10:00～18:00（予定）
会　場：①在日ベルギー王国大使館（※招待制）
　　②上智大学四谷キャンパス
主　催：「ベルギー学」シンポジウム2018実行委員会
共　催：日本ベルギー学会、ベルギー研究会、上智大学ヨーロッパ研究所
協　力：在日ベルギー王国大使館
参加方法：事前登録制（シンポジウムウェブサイトの専用フォームより受付の予定です）

プログラム（仮）

2018年12月7日（金）（プレイベント）
演奏会
レセプション

2018年12月8日（土）
開会挨拶

基調講演
「<タイトル未定>」
アンドレアス・テール（リエージュ大学教授）

発表（約8名による発表を予定）
※発表者募集中

閉会挨拶

懇親会

シンポジウムウェブサイト
https://www.jb150sympo.org/

発表者募集中

シンポジウムでは、12月8日の発表者を募集しています。

募集期間：2018年5月1日～6月30日
申込方法：シンポジウムウェブサイト内の「申込フォーム」よりお申し込み下さい。
お名前、E-mail、ご所属、発表タイトル、要旨（約400字）をご入力いただきます。

締め切り後、実行委員会で審査を行い、結果を連絡いたします。

発表者決定後のスケジュール
2018年9月30日：予稿集原稿(1,200字程度)提出締切
2018年12月８日：発表(20分)

研究会の記録

2017年度は、西宮、東京、都留、ブリュッセルにて、計4回研究会を開催いたしました。

第７０回研究会

日時: 2017年5月21日(日)13:30-17:30

会場：西宮市大学交流センター セミナー室2

【発表１】「ベルギー・フランス語幻想短篇集翻訳について＋マーテルランク「夢の研究」に刻まれた謎を解く」
岩本和子（神戸大学）

【発表２】「初期近代の文献における「ネーデルラント美術」の定義について」
河内華子（ルーヴェン・カトリック大学大学院／大阪大学）

【映画鑑賞】Belgian Rhapsody (Brabançonne) (Vincent Bal 監督、2014年)

発　表　要　旨

「ベルギー・フランス語幻想短篇集翻訳について＋マーテルランク「夢の研究」に刻まれた謎を解く」

岩本和子

1) ベルギー・フランス語幻想短篇集として出版した『幻想の坩堝』(松籟社)の紹介をしつつ、作品選択・翻訳上の諸問題、ベルギー「幻想文学」の射程などについて見解を述べ、今後の翻訳活動の方向性も考えたい。
2) 翻訳担当をさせていただいたマーテルランク「夢の研究」は、読後も(訳した後でも)数多くの謎が残る作品である。読者の判断や想像に任せて多様な読みを促す、開かれたテクストだという考え方もあるだろうが、あえて当時の作家のメモや諸資料、先行研究をもとに して謎の解明を試みる。例えば「物語」内でほぼ解決されたと見える語り手=僕の幼少時代 の夢と記憶の関係について。テクスト内ではついに明かされなかったW.K夫人とその親族が「誰なのか」。あるいはオランダ人である語り手=僕のアイデンティティとフランス語で書かれたテクストに係るマーテルランク自身の「声」との関係。ベルギー文学として、また象徴主義へと向かう萌芽的作品としての「夢の研究」の特殊性・重要性を確認することになる。

「初期近代の文献における「ネーデルラント美術」の定義について」

河内華子

発表者は現在、初期近代のドイツ諸都市におけるネーデルラント出身芸術家の活動の研究を行っている。オランダ独立戦争期(1568-1648)のネーデルラントでは、宗教弾圧や政治的・経済的状況の悪化を背景に、多くの芸術家が国外に流出した。ドイツ(当時は神聖ローマ帝国下)は、地理的・文化的な距離の近さや古くからの通商関係に加え、統治機構や宗教事情の異なる都市が共存する領邦国家であったことが誘因となって、様々な事情を持つ多くのネーデルラント移民を引きつけることとなった。本研究の目的は、これらの諸都市における芸術家の移住・定着のパターンを分析し、ネーデルラント美術の受容の諸相を明らかにすることである。

この問題を扱う際に考えねばならないのが、「ネーデルラント美術」の定義とは何か、そもそも初期近代においてそのような分類が存在し得たのかという点である。多数のネーデルラント出身芸術家がドイツ諸都市で活動していた事実は、彼らの作品に対する一定の需要が存在したことを 物語っている。その一方で、当時の美術理論書や芸術家列伝においては、「イタリア」(=南)に対する「アルプス以北」として、ドイツとネーデルラントの美術を一括りに扱う姿勢が見られる。両地域の芸術の様式や技法の特徴がどのように認識されていたのか、16-17 世紀の文献における記述を通して検証する。

第７１回研究会

日時: 2017年7月30日(日)13:00-17:00

会場: 明治大学駿河台キャンパス 研究棟第５会議室

【発表１】「ベルギー言語問題の政治化過程―フーレン地区の事例から―」
上西秀明（ヘント大学）

【発表２】「ポピュリズムの観点から見た現代ヨーロッパ地域政党の競合―ベルギー政党政治の事例―」
宮内悠輔（立教大学）

【発表３】「ミシェル・セールのエルジェ論」
縣由衣子（筑波大学）

発　表　要　旨

「ベルギー言語問題の政治化過程―フーレン地区の事例から―」

上西秀明

ベルギー王国を政治的に語る際、「言語対立を抱えた国」というフレーズは多くの人の共通認識であるだろう。それは確かに事実ではあるが、同時に、事実のいくばくかを語っているにすぎない。1830年の独立時にはフランデレン人もワロニー人も存在しなかった。それらはベルギー国民創造の副産物のような形で生まれ出た「概念」であり、その創造にはネイション形成のメカニズムが見て取れる。

フランデレンとワロニーに異なる言語が並存するという事実は、必然的に人々の間にコンフリクトを招くものではない。言語の違いが政治問題になるにはそのための条件とプロセスが必要となる。本発表ではダウンズのイッシューアテンション・サイクル理論を援用し、フーレン地区がいかにしてベルギー国民を二分するような言語紛争の渦中へ巻き込まれていったのかについて検証してみたい。

「ポピュリズムの観点から見た現代ヨーロッパ地域政党の競合―ベルギー政党政治の事例―」

宮内悠輔

近年、欧州で散見される地域主義政党の台頭は、既成政治はもちろん、ニュー・ポリティクスや急進右翼といった新しい政治運動でも説明できない現象である。特に報告者が注目する事例は、ベルギーの地域主義政党「新フランデレン同盟」(Nieuw-Vlaames Alliantie: N-VA)である。戦前から存在する既成政党や、さらに戦後台頭した環境政党・急進右翼政党とも異なるこの政党の躍進について、2度の連邦選挙に注目し、急進右翼でありつつ地域主義政党でもある「フラームス・ベラング」(Vlaams Belang: VB)と比較しながらポピュリズムの観点で分析した。その結果、地域対立によって硬直化した政治アリーナにおいては、地域問題への強い関心と既成政党に対する不満・不信感から「地域主義ポピュリスト」(RPP)が台頭するということが分かった。N-VAはRPPの中でも、「オルタナティヴ型地域主義ポピュリスト政党」と呼べる存在であり、その台頭がVBのような「排外型地域主義ポピュリスト政党」を衰退させていた。

「ミシェル・セールのエルジェ論」

縣由衣子

フランスの現代思想家ミシェル・セールは、エルジェと個人的に親交があっただけではなく、その作品であるタンタンシリーズを巡って、論文やエッセイを度々発表してきた。2000年には、それらの一部をまとめたものがHergé, mon ami と題されて出版され、その中でセールは自身の哲学の主題については、幾多の難解な書物よりも、タンタンシリーズから多くを学んだ、と述べている。本発表では、その中から『カスタフィオーレ夫人の宝石』について論じたセールの「笑い―うわの空の宝石、あるいは無傷の歌姫―」という論文を取り上げる。この論文が書かれた1970年代から1980年代、セールはコミュニケーションの哲学の重要性を提唱し、コミュニケーションに伴い、またそれを妨げる騒音の問題を論じていた。本発表では、セールのコミュニケーション論と『カスタフィオーレ夫人の宝石』がどのように接続されるのかを確認しつつ、セールのエルジェ解釈をつまびらかにすることを試みる。

第７２回研究会

日時: 2017年11月12日(日)13:00-17:00
会場：都留文科大学 3号館411教室

【発表１】「KU Leuvenのオランダ語夏期講習に参加して」
野崎次郎（人文系寺子屋　野崎塾）
【発表２】「シャルルマーニュ年代記と征服記」（ベルギー王立図書館、ms.9066）の献呈場面に関する一考察ー「君主の鑑」主題の著作との関係からー」
佐藤龍一郎（東京大学／日本学術振興会）
【発表３】「準都市国家化するブリュッセルー経験的研究に向けた枠組みの検討ー」
山口博史（都留文科大学）

発　表　要　旨

「KU Leuvenのオランダ語夏期講習に参加して」

野崎次郎

ベルギーの大学都市ルーヴェン（ルーヴァン）の町に惚れ込んで、4年前からオランダ語夏期講習（集中で80時間）に参加してきた。レベル１は１回でクリアしたが、レベル２はかなり手間取り、今年の夏に3度目の挑戦でレベル２の修了試験（A2+）に合格した。その間の難題をいかにクリアしたのかに絡めて、ベルギー研究をする上で、1) フランス語（オランダ語）一方にとらわれずもう１つの外国語を学ぶことの意義、2) その学習上で感じたヨーロッパの教育機関での「言語社会言語学」的な教育状況の関連（日本での外国語学習（教育）との違い）、3) その受講中に学んだ「外国語教授法」に関わる発見（年齢差、文化差）などについて簡単な報告をする。

「シャルルマーニュ年代記と征服記」（ベルギー王立図書館、ms.9066）の献呈場面に関する一考察ー「君主の鑑」主題の著作との関係からー」

佐藤龍一郎

本発表では、『シャルルマーニュ年代記と征服記』（ベルギー王立図書館、mss.9066-68）の献呈図を対象とする。この写本の注文主は、おそらくブルゴーニュ公国の貴族ジャン・ド・クレキであり、写本テクストは1458年頃にダヴィッド・オーベールが著している。それをジャン・ル・タヴェルニエが彩飾し、その献呈図の大部分は都市の光景が占めている。それゆえ、この都市景が献呈図の中心的な主題であるように見える。こうした都市景の強調は、献呈場面を大きく描いて君主とその権力を称揚するという伝統から逸脱するものである。本発表の目的は、エリザベス・ムーディーらの諸研究が充分に説明しないこの特徴の再検討にある。ジャンのパトロネージの傾向をその蔵書を中心に概観し、加えてブルゴーニュ公フィリップ善良公の蔵書も参照しながら、本作品の都市描写を当時のパトロネージ規範や「君主の鑑」を主題とするテクストと結びつけることを試みる。この作業を通じて、都市の理想的な統治を端的に示すという先行研究の指摘を具体的に裏付けようと試みるものである。

「準都市国家化するブリュッセルー経験的研究に向けた枠組みの検討ー」

山口博史

この報告では、ベルギーの連邦化にともなう地域的境界形成を都市研究の文脈でとらえなおすための枠組みを検討する。グローバル化のあらわれとして、開発や投資が都市・地域単位で行なわれていることがしばしば指摘され、ベルギーにもこの動きはみられるが、ベルギーの分権化はこれとは別の原理によって生じた面が多分にある。報告では関係する議論を確認したうえで、この並行現象をとらえるための枠組みを考えてみたい。

第７３回研究会

日時: 2018年3月5日(月)13:00-18:00
会場: 神戸大学 ブリュッセルオフィス

【発表１】「言語の威信―外交言語としてのオランダ語とフランス語―」
石部尚登（日本大学）
【発表２】「ベルギー在住日系国際児に対する日本語継承の現状と課題」
上西秀明（ヘント大学）
【発表３】「連邦化以後の移民政策の展開」
中條健志（東海大学）
【発表４】「19世紀中期の「ベルギー」音楽―*La belgique musicale*誌での連載「ベルギー音楽史」を中心に―」
大迫知佳子（広島文化学園大学）
【発表５】「アール・ヌーヴォーのコンセプトの発展―ヴィクトール・オルタの椅子に関する詳細な分析から―」
小田藍生（ブリュッセル自由大学）
【発表６】「ジェームズ・アンソールにおけるジャポニスム」
永井友梨（リエージュ大学）

発　表　要　旨

「言語の威信―外交言語としてのオランダ語とフランス語―」

石部尚登

1866年8月1日（慶應2年6月21日）、日本とベルギーは修好通商航海条約を江戸で締結した。日本にとって9番目の西洋諸国との条約であった。条約自体は日・仏・蘭語の3言語で作成されたが、正文はオランダ語とされた（第22条）。本発表では、両国の史料を用いて、当時の社会言語状況から日白条約における言語選択について考察する。

日本では、蘭学の伝統もありオランダ語が外交の言語とされてはいたが、すでに10年以上の外交経験を積み、オランダ語以外の言語の重要性も明確に認識されはじめていた。とりわけ安政五カ国条約以降、「当事国言語への志向」が高まりを見せていた。一方、ベルギーにとっては、独立以来のフランス語を事実上の唯一の公用語とする言語制度が続くなかで、オランダ語の言語運動がようやく政治化しはじめる時期でもあった。両国ともに社会言語学的状況の大きな転換期に置かれていた中でのオランダ語の選択であったことを示したい。

「ベルギー在住日系国際児に対する日本語継承の現状と課題」

上西秀明

在留邦人の増加に伴い、国際結婚家庭の日本語継承問題に注目が集まっている。継承語は一般に「親から家庭で受け継いだ言葉」と定義されるが、居住国社会で使用されるマジョリティ言語＝現地語と異なることから、その継承には多くの困難が伴う。ベルギーでも少なからぬ日本人親が子供の日本語継承を願っているが、現実は容易ではない。EUという枠組みの中で複言語主義が掲げられる一方で、多言語国家ベルギーにおいては日本語は第四言語の地位に置かれている。こうした現実にあって、国際児を持つ日本人親はどのような戦略を持って日本語継承にかかわっているかについてその課題を考えてみたい。

「連邦化以後の移民政策の展開」

中條健志

ベルギーでは、移民政策に関する権限は連邦政府内の行政機関および地域ごとに付与されている。したがって、移民政策にかんする意思決定を担うひとつの政府機関は存在しない。本発表の目的は、連邦化以後、各機関・地域がどのような方向性のもとで移民政策をすすめてきたのかについて、制度改革時における政治談話をもとに分析、考察することである。発表では、ベルギーにおける移民受け入れの歴史を概観した上で、連邦化によって移民政策がどのように分権化されたのかを提示する。そして、とりわけ統合政策の展開に注目しながら、分権化の過程において、彼（女）らの社会参加のあり方が地域ごとに大きく異なるものになっていったことを指摘する。

「19世紀中期における「ベルギー」音楽―*La belgique musicale*誌での連載「ベルギー音楽史」を中心に―」

大迫知佳子

1830年の独立直後、ベルギー音楽界におけるナショナリズムは、「ベルギー全土を対象とした統一的な音楽公教育の再組織を、国家政策として行う」という思想による、政治的国家主義的なものであった。一方、この公教育の再組織がひと段落した1840年代から、ペーテル・ブノワらが主導した民族運動が起こる1860年代までの約20年間は、音楽ナショナリズム研究のいわば「空白期間」となっている。

本発表の目的は、*La belgique musicale*誌に連載された「ベルギー音楽史」に焦点を当て、1840年～50年代のベルギー音楽界におけるナショナリズムの在り方を探ることである。発表では、La Belgique musicaleの音楽雑誌としての変遷を踏まえて「ベルギー音楽史」連載を分析することで、主として、1. 独立直後におけるナショナリズムからの方向転換の様相、2. ベルギーの独自性を「北方性」に見る文学界との思想的連動の可能性、の2点を指摘したい。

「アール・ヌーヴォーの誕生と発展―ヴィクトール・オルタの椅子に関する詳細な分析から―」

小田藍生

アール・ヌーヴォー建築は、19世紀末のブリュッセルで大きく花開いた。建築家たちは建築を総合芸術と捉え、建物だけでなく、家具、照明、壁面装飾、床までデザインした。その際、重視したのが、作品の一体感である。一脚の椅子をとっても、背と脚のつなぎ目は滑らかな曲線を描くように構成された。また、椅子とその周囲の家具、あるいは家具と建築との関係性が見直され、例えば、ソファーと本棚を一つに組み合わせたコージー・コーナーと呼ばれる新しい家具も誕生した。コージー・コーナーは単なる家具を超えた一つの建築作品と言うこともできるだろう。

この一体感というコンセプトは、アール・ヌーヴォー建築が誕生し、全盛期を迎えた1893年から1902年の間に、どのように生まれ、発展したのだろうか。その過程を明らかにするため、本発表では、世界で初めてアール・ヌーヴォー建築を建て、作品が持つ一体感にとりわけこだわりを持っていたヴィクトール・オルタに注目し、彼の椅子を分析する。椅子を分析対象とするのは、椅子の構造が比較的単純で、しかも、建築基準などの外的な影響を受けにくいため、作品から浮かび上がるオルタの考えを理解しやすいからである。また、椅子は現存する数も多く、詳細な分析が可能である。研究方法としては、1893年から1902年の間に制作された椅子のフォルムを詳細に分析する。とくに構成や線、椅子と空間との関係に注目しながら、論証を進めていく。

「ジェームズ・アンソールにおけるジャポニスム」

永井友梨

ジェームズ・アンソールは「仮面と骸骨の画家」であることは周知だが、近年ジャポニスム研究の国際的な高まりにともない、この画家の日本美術からの影響についての論評が増えてきた。実際、アンソールは『北斎漫画』などからの模写を残している。

本発表では、アンソールのジャポニスムをめぐって、東洋趣味的作品の分析と『北斎漫画』からの影響について考察する。この二つの論点において試みることは以下のことである。

まず、アンソールの用いる「シノワズリー」という語が極東の総称であることを前提とし、静物画に始まる東洋趣味的作品において、日本美術（工芸品を含む）が次第に幻想的なイメージと結びついていくことを論じる。

また、二つ目の論点として、同時代の芸術家たちとアンソールにおける『北斎漫画』からの影響について論及する。

ベルギー研究会運営委員(2017年度～)

会　長：岩本和子（渉外）
副会長：石部尚登（ウェブサイト）
　　中條健志（シンポジウム）
委　員：井内千紗（書記、ML・会員管理）
　　今中舞衣子（シンポジウム、会計）
　　内田智秀（例会）
　　白田由樹（例会）
　　吹田映子（会計）
　　鈴木義孝（例会）
　　山口博史（例会）

今後の活動予定

第７４回研究会
日時：2018年5月26日(土)
会場：西宮市大学交流センター セミナー室2

第７５回研究会
（日本ベルギー学会との共催）
日時：2018年6月15日(金)
会場：在日ベルギー大使館

第７６回研究会
時期：2018年7月29日(日)
場所：明治大学

第７７回研究会
時期：2018年9月22日(土)、23日(日)
場所：長崎大学

「ベルギー学」シンポジウム2018「交流の“いま”」
日時：①2018年12月7日（金）（時間未定）
　　②2018年12月8日（土）10:00～18:00（予定）
会場：①在日ベルギー王国大使館（※招待制）
　　②上智大学四谷キャンパス

第７８回研究会
時期：2019年3月上旬
場所：ブリュッセル

各会の詳細は、メーリングリストで随時お知らせします。

刊行物の紹介

現代ベルギー政治　連邦化後の20年

津田由美子・松尾秀哉・正躰朝香・日野愛郎 編著
ミネルヴァ書房、2018年5月刊
定価：2,800円＋税
ISBN：978-4-62308-121-9

【目次】

序　章　何のために現代ベルギー政治を学ぶのか
（正躰朝香・津田由美子・日野愛郎・松尾秀哉）
＜第Ⅰ部　ベルギーの政治力学＞
第１章　連邦化をめぐる政治史（津田由美子）
第２章　ベルギー政治における国王（松尾秀哉）
第３章　政党政治のダイナミズム（日野愛郎）
第４章　柱状化社会（作内由子）
第５章　EU統合とベルギー政治（正躰朝香）
＜第Ⅱ部　ベルギーの主要政策＞
第６章　言語・教育政策（石部尚登）
第７章　文化政策（井内千紗）
第８章　社会保障政策・家族政策（千田　航）
第９章　移民政策（中條健志）
第10章　環境・エネルギー政策（本田　宏）
第11章　安楽死法にみる生命倫理（三井美奈）
第12章　外交・安全保障政策（小林正英）

初学者にもわかり易い記述で、連邦制導入後のベルギーの全体像を学ぶテキスト。

戯曲　ヴェール

ジョルジュ・ローデンバック
村松定史（訳）
森開社、2017年11月25日刊
限定300部、定価なし

ベルギー人の戯曲としては初めてコメディ＝フランセーズに受理され、マルグリット・モレノ主演で上演された戯曲の翻訳と関連資料を収載。

限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究

定延利之 編
ひつじ書房、2018年2月16日刊
定価：8,800円＋税
ISBN：978-4-89476-905-2

第4章 エスニック・ジョークと倫理に「ベルギー人・オランダ人のジョーク―相互関係のバロメーター」（櫻井直子・ダヴィッド＝ドゥコーマン著）、「フランス語による「ベルギー小話」」（岩本和子著）を所収。

ベルギー研究会　会報
Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies
第６号
発　行：2018年5月
編　集：井内千紗
事務局：神戸大学大学院国際文化学研究科　岩本研究室
ウェブサイト:http://www40.atwiki.jp/kbek/

ベルギー研究会
Japanse vereniging voor de studie van België
Association japonaise d'études belges
Japanische Vereinigung für Belgische Studien